

大澤武男著「ユダヤ人の教養—グローバリズム教育の三千年」ちくま新書(1026)、筑摩書房、2013年8月10日刊を読む

## ユダヤ人の教養—グローバリズム教育の三千年

### 1. ユダヤ的学習方法の特徴と指導方法

- (1) ヨーロッパに住んでいていつも思うのは、日本人社会では各自が自分の意見を率直に出してぶつけ合い、議論することがきわめて稀だということである。ドイツのオーケストラでバイオリニストとして活躍しているある日本人女性は、「日本では自分の意見なんて言うてはいけないのよ」ともらしている。上下関係の社会構造を持つ日本では、上から言われたことを実行する、教師より教えられることを学ぶというのが当たり前となっており、そこには対話(ダイアログ)、議論の前提がない。しかし、よりよい考えや、よりすぐれた見解に到達するために、対話や意見交換は不可欠である。
- (2) 自分の意見や主張をはっきりと提示して論争することを躊躇する日本人の習慣は、個性のない、個の確立が弱い日本人の人格と無関係ではあるまい。そう考えると、対話や議論、自己主張を前提とするユダヤ的教育の伝統は、日本のそれときわめて対照的であることを知るのである。伝統として受け継がれたユダヤ的学習方法は大きく2通りある。
  - ①第1は、不動である神の律法トーラーをそのまま、常に声を出して反復、復唱して、間違いなく暗唱し完璧に学ぶこと。この学習方法を通してユダヤ人は重要事項、いついかなる時も忘れてはならない事柄を確実に覚え込む方法を学ぶ。
  - ②第2の方法は、律法の伝承タルムードを学ぶ時は、そのまま鵜呑みにすることなく、常に質問、疑問を提示して議論を重ね、十分な話し合い、論争の後、その時々によさしい律法の適用を学ぶという方法である。
- (3) 先人賢者たちの伝承律法である「タルムード」は、そもそもヘブライ語で「学習」を意味する。聖典そのものとしての「トーラー」は「教える」という動詞に由来する「(神の)教え」を示す言葉である。これも、ユダヤ教が「学びの宗教」といわれる所以である。
- (4) このような学習方法に基づくユダヤ教育所の存在は、「トーラー」が成立した紀元前5世紀には跡づけられる。また遅くとも紀元2世紀中頃以来、5歳以上の男児の全日制基礎学校への通学は慣例となっていた(R・M・ヘルヴェーク『ユダヤ人の母』82－84頁)。
- (5) 学校で子供たちは法律を丸呑みに学ぶのではなく、各自が対話や議論を通して体得し、学習しなければならないことが明示されていた。それは一人一人が修得した神の掟を、身をもって実行しなければならないからである。そこで要求されるのは、学ぶことへの自らの参加、積極性である。学ぶことと実践は表裏一体をなしていて分離することはできない。修得した律法は単なる知識ではなく、生活において実行すべきものであり、すべてが神の面前での仕業となるのである。(同上83頁)。
- (6) ユダヤ的教育が基礎学習を重視することはよく知られているところであるが、教師ラビは自らトーラーを朗読、復唱して見せ、生徒にもトーラーを朗読、復唱させ、子供たちが確実に習得し

たかどうか常にチェックする。この繰り返し学習は、すべての教科において基礎を重視するユダヤ的伝統、ユダヤ的教育理念の根源となって発展していった。その際基礎学校と並んで重要な役割を果たしたのは、家庭の母親であった。

- (7) 周知の通り、ユダヤ人女性から生れた子供はユダヤ人と規定されている。ユダヤ人の母親の教育熱心は世界一といわれるほどで、家庭内における母親の権限は強く、母親は自分の生んだ子に名前をつける特権を慣例的に持っているほどである。ユダヤの母親は家事をきりもりすると共に子供の教育、特に幼児教育を大切にする。これがユダヤ人を優秀にしている要因ともいわれる。
- (8) ユダヤ的伝統を教える旧約聖書「集会の書」には、子育ての大切さ、幼児教育の大切さがくり返し強調されている(6章18－23節、30章1－13節など)。母親は子供が物心ついた頃から毎日の祈りで反復、復唱の大切さを教え、同時にタルムードの勉学精神に則り、常に問いかけ、多面的、独創的な考え方を子供から引き出すよう心掛けるのである。

鵜呑みにしないこと。絶えず疑問を投げかけ、検証すること。対話と議論により常に究明するというタルムード学習の精神が、ユダヤ的伝統としてすぐれた人材を出す源泉となっている。

## 2. 日本的学習との比較

- (1) このように見てくると、人格と生涯を左右する教養の形成が、日本はユダヤ的伝統ときわめて異なっているのがわかる。
- (2) 「テスト問題対策」に最大の重点がおかれている日本の学習では、教育の中で疑問を投げかけたり、質問を持ち出して議論したり、話し合ったりという機会が少ない。ほとんどは、さしたる対話も議論もなく、上から与えられる解法をそのまま受け容れるという形式、方法でなされる。教師が「正しい解き方」を示して学習教材をこなし、先へ先へと進むことだけを念頭におく日本の多くの指導では、批判的なものの見方を養成する余裕はない。それに慣れてしまうと討論も意見交換もできないから、個々の主張や見解、イニシアチブに欠けることになり、考える力が確立しにくい。
- (3) ユダヤ教哲学者マルティン・ブーバーの言い方によれば、「教育とは教師と生徒の対話」が前提であり、両者の「対話」が親密であるほど、理想的な教育がなされるという。対話を通して、まず教師と生徒の信頼関係と互角の前提ができ上る。学習内容は対話と質疑応答を通して行われることで、より深い認識、理解に到達できるのである。こうして習得された学習内容は、個々の生徒の理解、見解として自主的な考え方にも生かされ、行動のもとになってゆく。「優秀な生徒とは、すぐれた質問を投げかける生徒なのであり、返答、解答よりも、よりよい質問、問題の提起こそすぐれている証なのである」というユダヤ精神は、優秀なユダヤ人を次々と生み出す源泉となっているが、日本の指導型教育に欠けているのは、まさにこのユダヤ的学習方法であると考ええる。
- (4) 長期的展望に立ってなされるべき教育を考えると、日本のそれはあまりにも成績や受験という目先の効果のとりこになりすぎており、生涯にわたって人間の実力となる考える力、批判的認識能力、自己主張と自主性の養成において、多分に欠けていると言わざるを得ない。

### 3. 知恵と教養、実践と行動、そして暴力

- (1) さて、ノーベル賞は別としても、現代を代表しているといえる三人のユダヤ人女性、ローザ・ルクセンブルク(1871 - 1919 年)、エーディット・シュタイン(1891 - 1942 年)、ハンナ・アーレント(1906 - 75 年)たちの不屈の学究、批判精神、信念の貫徹、行動力の中にもユダヤ的伝統が生きていた。
- (2) 急進派社会主義理論家であった、**ローザ・ルクセンブルク**はポーランドのユダヤ的伝統の家庭に育ち、ユダヤ教との関連を拒否していたが、右翼勢力に殺害されるまで逃亡と行動の生涯を送り、自ら確信した社会主義とその信条を実現しようとした行動力、姿勢の中にユダヤ精神が生きていた。
- (3) ユダヤ人商人の娘であった**エーディット・シュタイン**は現象学派の祖として当時を代表する哲学者エドムント・フッサール(ユダヤ人)のもとで研究を重ね、後にカトリックに改宗し修道女になるが哲学研究に専念し、ナチスにユダヤ人として追跡され、アウシュヴィッツで殺害されるまで、自らの信念と批判精神を貫徹した人であった。
- (4) ユダヤ人を両親として生まれた**ハンナ・アーレント**は、宗教としてのユダヤ教とは距離を保ったが、自分がユダヤ人であることを自認していた。17 歳で哲学の勉強を始め、当時すでに名のあった哲学者マルティン・ハイデッガーと恋愛関係に陥るとい体験をした彼女は、哲学研究の傍ら政治思想にも傾倒し、正義と自由を基調とするユダヤ人問題、女性解放問題に関する批判的政治思想を展開した。1933 年ナチ政権が成立すると一時逮捕されるが、解放されると同時にナチスとの対決を宣言し、彼女の逃亡と無国籍の生活が始まる。ドイツからフランスへ、フランスからポルトガル・リスボン経由でアメリカへの逃亡生活の中で、ユダヤ人のパレスチナへの逃亡に援助の手を差し伸べると共に、反ユダヤ主義の学問的研究、講演に明け暮れた。そして、ユダヤ人としての自覚をますます深めたアーレントは戦後アメリカへ帰化し、イスラエル国家の成立と共に始まったパレスチナ問題と取り組み、ユダヤ民族の安住の地の必要を訴えると同時に、イスラエル建国に傾注したシオニストたちのアラブ民族に対する配慮不足を厳しく批判し、両民族の連邦制に基づく共同管理、平和共存を提唱した。
- (5) イスラエルとパレスチナの敵対、構想の溝が深まるばかりの今日、現代における偉大な政治思想家の一人であるアーレントの勧告は再び見直されるべきであろう。そして彼女は「**古代以来のユダヤ民族の生き残ることへの情熱(ニーバ レーベンスライデンシャフト)**」こそ、ユダヤ人の**力の根源**であることを繰り返し主張していたのである。
- (6) この「生き残ることへの情熱」がユダヤ人を賢くし、常に高い教育、教養の持ち主にしていったのである。「ユダヤ人を滅ぼしてしまえ」という考えや試みは、すでに旧約時代からあったのであり、古代ペルシャ帝国やヘレニズム時代に早くも民族滅亡の危機に遭遇したユダヤ民族は、「生き残ること」を常に課題としなければならなかった。

P205 ~ 207

#### [コメント]

本書を読むと、なぜユダヤ人が人口比にして日本人の 100 倍ものノーベル賞を受賞しているのかその理由がよくわかる。重要なのは、苦難の歴史に裏打ちされた教育への姿勢と教養への態度である。

— 2013 年 11 月 11 日 林 明夫記 —